

---

# 花火

風舞 空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

花火

### 【Zコード】

N5470M

### 【作者名】

風舞 空

### 【あらすじ】

ふとした瞬間感じる切なさ、的な。誰にだって一度は体験する様な事かもしれませんね。

(前書き)

ふと思いついて殴り書きした掌編的なもの。今回のBGMはsupercellの『うたかた花火』でし。

大きなりんご飴を持って、彼は戻ってきた。

「・・・はい、これ。やるよ。」

握られた一つを、私に渡すと彼は、もう片方を大きな口を開けてそれを齧り付く。

「あれ、そうやつて食べるんだ隆司は。たかし」

「え？ これ以外にどういう食い方があんの？」

「ううん、と・・・」

私はペロリ、と丸みのある側面を舐めて見せる。すると彼は、私のそれにあははつ、と声を出して笑つた。

「そんなんじゃ、いつまでたつても無くならねえだろ」

ほら、と差し出された手が『早く行こう』と催促している。私はそれに手を重ねた。

握られた手は、少し湿つていてじんわりと熱が伝わって来る。

私の手を引いて、彼は人混みを掻きわけながら進んでいく。浴衣を着ているせいか、必然的に歩幅が小さくなる。それでもどんどん先に進んでいく彼に、少し小走りになつてついていく。カラーン、とう下駄の音があちらこちらから響いて、何だか心地いい。

8月後半に行われる地元の大きな夏祭り。隆司と来たのは、これが

初めてなのだ。

付き合い始めて半年。彼と迎える、初めての夏である。遠くで聞こえる太鼓や囃子の音色を聞くと、夏ももうすぐ終わるんだなあ、なんて少し shinmiri してしまつ。

ふと、前を行く彼の足が止まる。

「・・・あ、ごめん。チヒロ浴衣だもんな。ちょっと早いかな」

私の足元を見ながら、彼は呟いた。

「う、うん。私はごめんね・・・下駄、履き慣れてなくつて」

並ぶように隣まで来ると、今度は私の歩幅に合わせる様にゆっくりと歩き始める。

すっかり食べ終え、芯だけが残つたりんご飴の棒を片手に、今度は私のそれに手を伸ばす彼。

「ひょっと一隆司はもう食べただでしょ」

ムキになつて、握られた手をふいに離し彼のそれから逃れる。ちらり、と顔を見上げると拗ねたような笑みを浮かべながら、離した右手をきゅっと握られた。

「ほら、早く行かないと花火、始まつちまつぜ」

そつと彼は、また私より先を歩き始める。

・・・そういえば、この感じ。前にもあつたつける。彼の後ろ姿

を眺めながら、ぼんやりと考えてみる。

もう1年も経つのに、あの時の事は今でも鮮明に思い出せる。このお祭りにも、一緒に来ていたつけ。

あの人もこんな風に私の手を引いて歩いていた。人混みを掻きわけながら。

（もしかしたら、今年も来ているのかな。）

思わず、あたりを見渡してしまつ。こんなところにいる訳ない。分かっているけど。

（会いたい、な・・・。）

一目でいい。もう他のヒトがいるのなら、それでもいい。・・・いや、その方がいい。私だってもう新しく歩き出しているんだから、思い出さなくともいい筈なのに。何故だか忘れられないんだ。繋がれたこの手に、温もりに、私はまだあの人を重ねてしまう。

鼻の奥がツン、とする。そして突然、視界に込み上げてきた涙がほろ・・と頬に落ちた。

抑えようとすればするほど止まらなくなつて、必死に袖で拭つた。左手に握られていた箸のりんご飴が、いつの間にかなくなつていて、何かの拍子に落してしまつたのだろうか。

・・と、私の歩みが遅くなつた事に気付いた隆司が、こちらへ歩み寄つて来る。涙で濡れた私の顔を驚いた様な顔で見つめながら、目線を合わせる様に少し腰を屈め、そつと頭を撫でた。

「どうした、何かあつたのか？」

何でもない、と言いかけた瞬間 ひゅるひゅる、と言づ音と共に登つていく細い糸が、大きな音を立てて花開く。私の声はその音と、空を見上げ歓声を上げる人々の声にかき消されてしまった。

「あー・・・。始まっちゃつたな！でも、ここから十分綺麗に見えるな。もう、いつか」

花火のそれに負けないぐらいの声で、彼は私にそう言つて笑いかけた。本当は、少し高い所まで行つて観ようと高台に登る予定だったのだけれど、その場所まではまだ結構距離がある。辺り着く頃には終わつてしまふかもしない。

首をぐん、と上に向けるのが少し痛いけど、夜空に上がる色とりどりの花火に見惚れ、そんな事ももう気にならない。

ふいに彼の盗み見るよう日に目を向けると、打ち上がる花火の色が瞳に映り、キラキラと輝いている。無邪気に歓声を上げながら、まるで子供の様なその様子に少し笑つてしまつ。

パツ、と打ち上がつては消えていく大輪の花。いつまでもそこにあらわけではない、儂くて尊い光の命。

5年、10年20年……。一体いつまで、彼とこうして同じ景色を眺めていられるのだろう。終わりが来る事なんて考えたくないけれど、できればこのままずつと……私は彼の隣でこの花火を観ていてみたいと思つた。

・・・終わった事を今更考えて泣くなんて、今こうして隣にいてくれる彼に申し訳ない。私はもう、振り返らないと決めたのだから。

「チヒロ」

名前を呼ばれ、見上げると隆司の顔がすぐ近くにあった。そして私の額へ触れるか触れないかという程に唇を落すと、目を細めて微笑んだ。

「好きだよ」

周りの音に掩き消されよく聞こえなかつたけれど、口の動きが確かに『好き』と伝えている。

「・・・私も。」

小さく咳ぐ。きっと彼には聞こえていない。  
だけど繋いだこの手の温もりと絡める指先で、十分伝わっているだ  
ろう。

確かにあつたあの夏の日は今、新しく塗りかえられていく。彼と見  
る、新しい景色に。

また時が経てば、いつかは笑い話になる日が来るのだ。その日まで、  
この思いはそつと鍵を掛けてしまつておこう。少なくとも彼といら  
れる、この瞬間だけは。

私はまた空を見上げた。真つ暗な闇に打ち上がつたとびきり大きな  
花火を、目に焼き付ける為に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5470m/>

---

花火

2011年1月28日11時25分発行